

K-Ship

安全・安心で快適な暮らしの実現を目指して

九州を語ろう
ケイ・シップ

Vol.1
2008

創刊号

CLOSE UP INTERVIEW

福岡
ソフトバンク
ホークス

松中信彦・恵子夫妻が語る 「九州の魅力」



大分川水系七瀬川

生活起点 林田スマさん

—九州の魅力—

温かさと、ほんの少しの不便さ

特集 「九州の暮らし」

創刊に寄せて

私たち日本人の暮らしは、戦後の急速な経済発展とともに身の周りは「物」に溢れ、世界に冠たる長寿社会を実現するなど大幅な改善を遂げました。

しかし、一方で、我が国では人口減少や少子高齢社会への対応、東アジア諸国の台頭などによる国際競争の激化、地球温暖化による気候変動など、解決しなければならない新たな課題にも直面しています。

社団法人九州地方計画協会は、昭和53年に社会資本整備を通じて九州の発展に貢献することを目的に設立され、今年で30周年を迎えました。

これを機に、九州の人々の安全・安心で快適な暮らしの実現を、社会資本、社会基盤の側面から考え、そのことを誌面を通じ紹介していくこととしました。

温暖な気候と豊かな自然に恵まれた九州。そこでの暮らしが充足感のあるものとしていくためにはどうすればよいのか。

「九州」にともに暮らす皆さんと考える。

それが「K-Ship」の目指すものです。

平成20年5月

(社)九州地方計画協会

C O N T E N T S

■ CLOSE UP INTERVIEW

松中信彦・恵子夫妻が語る九州の魅力…………… P1~3

■ 生活起点 林田スマさん

—九州の魅力— 温かさと、ほんの少しの不便さ…………… P4~5

■ 特集

「九州の暮らし」

●九州の魅力と課題…………… P6~9

「住む」【TEAM GEAR 代表 松本 由利さん】…………… P10~11

「働く」【(株)ルネサンス・プロジェクト 代表取締役社長 中村 鉄哉さん】…………… P12~13

「遊ぶ」【安心院町グリーンツーリズム研究会 会長 宮田 静一さん】…………… P14~15

「育てる」【ひだまりの会 支援アドバイザー 武石 優子さん】…………… P16~17

■ 安全・安心で快適な暮らしの実現を目指して…………… P18~20

■ 九州の中の風景

松中信彦・恵子夫妻が語る 九州の魅力

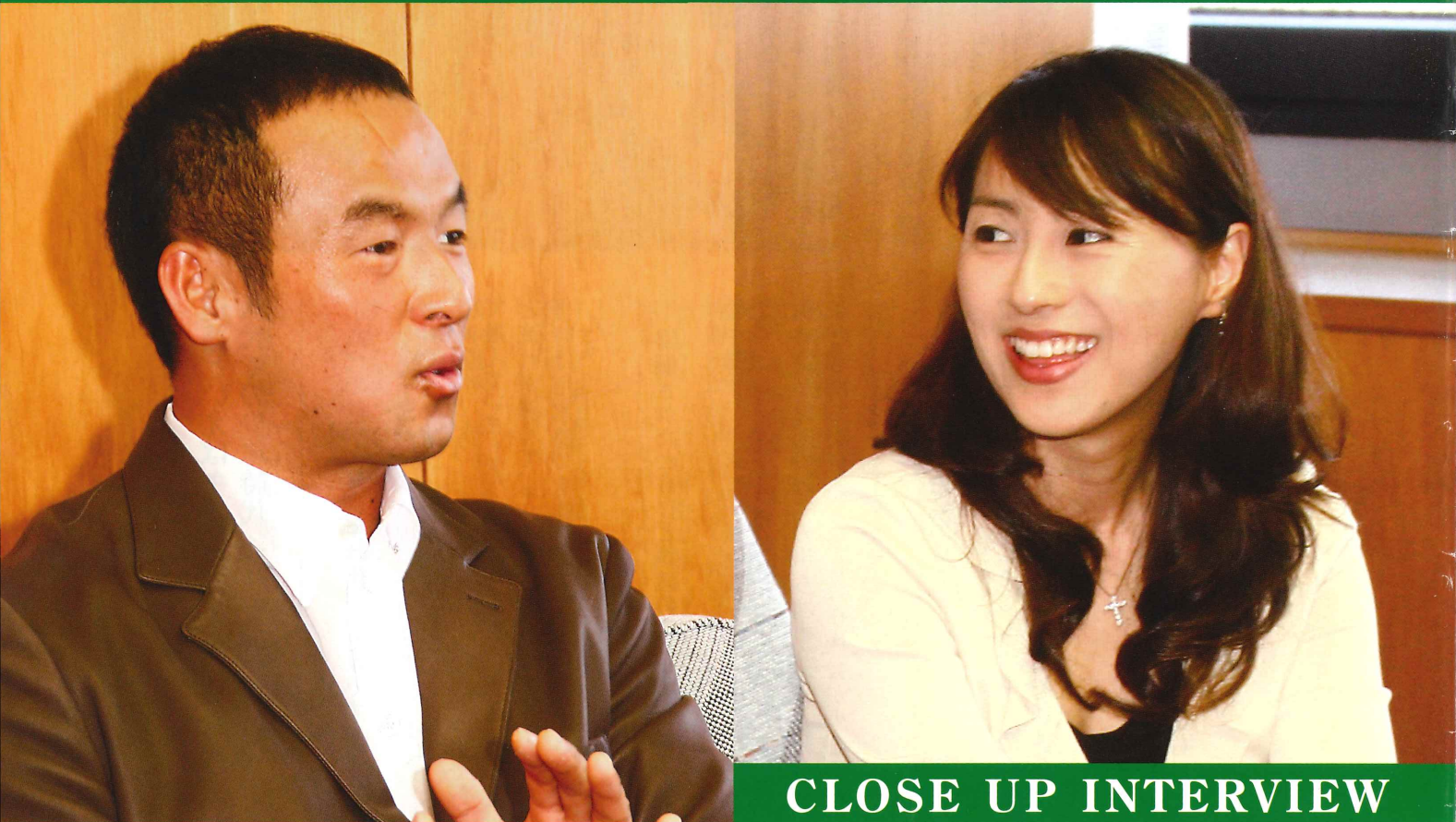
～コンパクトな都市はスポーツ選手の体調管理にも最適～

福岡ソフトバンクホークスの主砲・松中信彦選手は熊本県八代市出身。

遠征などで九州外の都市に滞在することも多い同選手は、九州に住み、働くことをどう感じているのだろうか。

また結婚を機に初めて福岡にやってきた恵子夫人の九州の印象は？

お二人の幼年時代の思い出などを交え、野球を通して見た九州の魅力についてうかがった。



CLOSE UP INTERVIEW

球場まで自転車を通えるのは
全球団の中でもソフトバンクホークスだけ

―九州のファンの声援をどう感じますか。

松中選手 熊本県八代市で育ち、5年ほど千葉に行つて戻ってきたんですが、人の温かさ、熱心さが九州は違いますね。福岡、北九州は特にアツい。街でも「しっかりやれよ」と声をかけられますし、期待感がひしひし伝わってきます。

―温かさでもあり、厳しさでもありますね。

松中選手 関東ではプレーの良し悪しに関わらず冷静に見る人が多いんですが、九州はアツいだけに、だめなときはものすごく叩かれる(笑)。僕にはそれがありがたい。そんな環境の中でやらせてもらえてとても感謝しています。

―奥さまは東京でお仕事をなさっていて結婚を機に福岡へいらっしゃったそうですが、不安はありませんでしたか。

恵子夫人 なにも考えずに(笑)すんなり入れました。住んでみると、空港も街も近く全てがきちんとまとまっていて、私にはすごく生活しやすい街。なおかつそこに海もある。なかなかこういう場所はないと思います。買い物や学校の帰りに子どもとちよつと海に行こうって言えるのはとてもいい。

―野球をする方にとって福岡のようにコンパクトにまとまっている都市というのはいかがですか。

松中選手 大きなプラスです。特に空港が近く、渋滞が少ないのはいい。空港が遠い都市は多いし、大都市では渋滞にはまると時間が読めない。デーゲームだと早く出なくちゃいけないからたいへんです。東京では試合が終わって帰るまで1時間以上かかるのに、僕は10分後には家にいる(笑)。他の球団からもうらやましがられます。

―さっきまでテレビに出ていたのが、もう家にいる(笑)。ところでシーズン中は福岡にいる時間は少ないでしょう。

松中選手 半分は遠征です。ハードだからこそ、帰ってきたときの福岡の便利さがあるがたい。何しろ空港から20分ですから。身体の疲れも違います。僕は時々、自転車でドームまで通うんですよ。

―…え!?途中で発見されて大騒ぎになりませんか。

松中選手 大丈夫。「あー!」って気づいた時には走り去っていますから(笑)。自転車で通えるのは12球団の中でもうただけじゃないでしょうか。

道路といえばキャッチボールだった 八代での少年時代

―八代ではどんな少年時代だったんですか。

松中選手 基本的に野球をやっていましたが、山手の宮地というところへよくみんな自転車で行って遊んでいました。球磨川があつて上流に行くほど流れが速くて、そこで泳いだり、飛び込んだり。当時は用水路でも泳いでいたくらい水がきれいでした。

―帰郷されたときなど環境の変化を感じますか。

松中選手 年末に後援会のパーティーもありますので、年末年始は必ず実家で過ごします。昔よく釣りをした家の近くの川も埋め立てられ、八代の子どもたちが自然と触れ合う機会が少なくなっていくのが少し寂しいですね。

―道路で遊んだ思い出は。

松中選手 道路といえばキャッチボール。それしかないですね。昔は車も少なかったし、それほど広い道がない抜け道みたいな道が多かったです。

恵子夫人 私が小学校の頃よくやった遊びは、家を出るときに、今日は「右右左」とか「左右左」と

決めて出発して道路をずっとその通りに進むんです。目的地はない(笑)。行けるところまで行って、分からなくなったらおまわりさんに「ここどこですか」と聞く(笑)。楽しかったです。

ファンが集まりやすい環境整備を進めてほしい

―さて年内には新八代駅前「松中記念館(仮称)」が完成予定ですね。

松中選手 人口減で野球をする子どもたちも減ってきています。野球人口の底辺拡大は野球に





関わる全ての人の願い。その中で「八代がもっと盛り上がるってほしい」との思いから、お役に立てればと、寄付をさせていただきました。見学に来た子どもたちがソフトバンクホークスを好きになつてくれたり、松中選手のようになりたいという子どもたちが増えれば嬉しいです。九州新幹線が全線開通すれば、もっとたくさんの子どもたちが来てくれる。いい時期だと思っています。

―八代のファンの応援は、やはり特別なものがあるのでしょうか。

松中選手 親近感が強すぎて遠慮がない。(笑)

恵子夫人 同じ気持ちになつてくれてるんじゃない？家族の一員として見てくれているように思えますよ。

松中選手 うん、そういう意味でも記念館が八代の活性化の起爆剤になればと期待しています。

―九州の良いお話を伺いましたが、逆に要望などありませんか。

松中選手 ドームのまわりにもっと駐車場があったらいいですね。もしくは難しいかもしれませんが地下鉄をドームまで延長する。駐車場を探すのに時間がかかつて初回から観られない人が少なくないんです。これが解決できればもっとたくさんのお客様さんに試合を楽しんでいただければ幸いです。

―ファンの方がより集まりやすい環境を、ということですね。

松中選手 そうです。今、親子で観戦する人が増えてきていますので、親子のふれあいの機会を充実させるためにも、ぜひ周辺整備を進めてほしい。野球を話題に親子のいい関係が築いていければすばらしいと思います。

―本日はお忙しい中、ありがとうございました。



松中 恵子

1973年生まれ。山口県山陽小野田市出身。早稲田大学卒業。1997年静岡放送入社。1999年フリーアナウンサーに。2000年に結婚し、福岡へ。現在もテレビ等で活躍中。



松中 信彦

1973年生まれ。熊本県八代市出身。1996年に福岡ダイエーホークスに入団、1999年には初のリーグ優勝・日本一に貢献。2006年にはワールドベースボールクラシックの日本代表に選出され、4番バッターとして活躍した。三冠王1回、本塁打王2回など、受賞多数。

九州の魅力ー 温かさ、ほんの少しの不便さ

少子高齢化や女性の社会進出が進む中、女性が働きながら安心して子育ての出来る地域づくりが課題となっている。東京と福岡での子育てを経験され、現在「大野城まどかびあ男女平等推進センター」所長である林田スマさんに子育てを通して「九州の魅力」についてお話をうかがった。

ー林田さんはどんな環境で子育てをされましたか？

私は24歳でRKB毎日放送を退職し、結婚して東京に9年間住んでいました。その時に子どもを二人産んで東京で子育てをし、昭和55年に福岡に戻ってきました。夫は地質調査の技師で、海外に出ていることが多かったので、私にとって東京時代は、全く知らない土地で何の支援もなく、ただ家庭の中で子どもだけと向き合う日々でした。家庭ばかりの生活になると、精神的にバランスが取れなくなると、それこそ弱い立場にいる子どもにも手をあげてしまうんですね。子どもたちもよく耐えたと思います。私の人生はこのままでいいのだろうか、やりきれない気持ちで、東京で9年間を過ごしました。

33歳の時、ちょうど夫の仕事の都合で福岡に帰ってくることで、フリーのアナウンサーとして再スタートしました。それから週に3日、4日、5日と、子どもが大きくなるにつれて仕事が増

えていきました。仕事を持つことで、家の中だけではなく、1日に3、4か所移動して働いたり、自分の住んでいる町の地域活動に参加したり、自分の好きなことが出来たりと、生活の中に柱が何本か立つことよって、はじめて私が私らしくいられるようになった気がします。

ー九州・福岡で子育てをしてきて、どんなところに魅力を感じていますか？

東京にいた頃は家の中でいつも眉間に皺ばかり寄せていたので、子どもたちからも「お母さん、幸せなんだろうか」と思われていたくらいだったのですが、福岡に戻ってきてやっと心が平らになって、まっすぐ生きられるようになり、子どもからも「福岡に帰ってきてから家族が幸せになった」と言われました。東京にいた頃も、社宅でのコミュニティはあったのですが、社宅というのは夫の肩書きを背負った妻たちの特殊な人間関係があり、私の九州への思いが強すぎたせいか、「仮住まい」という意識が強かった気がします。

九州の魅力は、おせっかいなくらい温かい「人」だと思います。福岡に戻ってきてから子育てにおいて一番変わったことは、「周りに支援をしてくれる人が増えたこと」です。実家の両親だけでなく、地域の人々が子どもたちに目をかけてくれる、そうした土壌の中で子どもたちも精神的に安定し、身体も元気になりました。



大野城まどかびあ男女平等推進センター所長
林田スマさん

そういえば娘から「東京にいた頃のお母さんは漬物石だった。その重石を上げてほしかった。」と言われたことがあります。それまでは私だけの価値観で「あれは駄目、それも駄目」と上から押さえつけていたのですが、福岡に来てからは「そんなこと気にしなくていいのよ」と周りのいろんな大人たちの多様な価値観に触れることよって、その重石が軽くなったのでしょね。私も子どもたちも気が楽になりました。東京にいた頃は子どもたちはストレスから病気をすることも多かったのですが、福岡に帰ってきてからは風邪さえも全く引かなくなりました。

九州の「ほどよい都会」と「ほどよい田舎」と、九州の「食」と、「温かい人々」に囲まれて、私たち親子は幸せになれたのだと思います。子どもも大人



も、周囲から「よくがんばったね。」と褒めてもらいたい、周りに認めてもらいたいんですね。九州には独特の「おせっかい文化」があるので、それができるんだと思います。外に出て、いろんな人の「風」にあたることによって、人から元気ももらうことができるのです。時にはそれが冷たい風であっても、それもいい刺激になるんですね。

—九州がもっと輝くためには、どんなことが必要だと思いますか？

何でも揃っている大都会のような、便利で快適な生活よりも、ほんのすこし不便だったり、ほんのすこしの居心地の悪さがあったほうが、よいのではないのでしょうか。助け合いが生まれ、耐える力が育まれるような気がします。子どもに関して言えば、母親から大切にされすぎて、家の中があまりにも快適すぎると、学校生活が逆に辛くなりませんか。叱られたり手伝いをさせられたりと、多少家の中での居心地が悪いほうが強くなれると思います。

地域性に関しても「ほんのすこしの不便さ」は必要だと思えます。高速道路のサービスエリアだって、画一的な便利さから脱却して、地域性や個性を打ち出そうとしています。「道の駅」だって、「そこではか手に入らない」といった個性が必要です。環境についても、たとえばコンクリートで護岸工事が施された河川よりも、昔の自然のままの河川のほうが個性がありますよね。最近では、安全に配慮しながらも、昔のような河川に戻していこうとする動きもあるようです。

これから九州が輝いていくためには、自然や人に寄り添う「ほんのすこしの不便さ」を「地域の個性」として、もっと大事にしていく必要があると思います。大都会のような利便性がなくても、ちよつと立ち止まったり、遠回りしたくなるような、魅力ある「地域づくり」が今後求められていくと思います。



林田 スマ

1947年生まれ。福岡県嘉穂郡出身。元RKB毎日放送アナウンサー。1997年より大野城まどかびあ男女平等推進センター所長。ラジオパーソナリティのほか、エッセイスト、講演活動などでも活躍中。

特集「九州の暮らし」

九州の魅力と課題

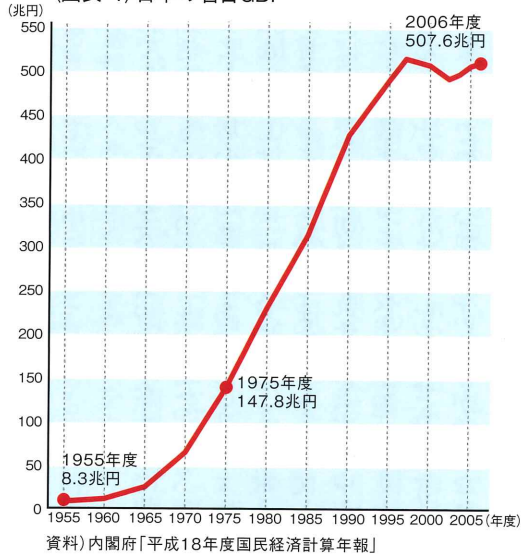
安全・安心で快適に暮らしたい

豊富な自然と適度な都会性を併せ持つ九州。創刊号特集では、私たちの生活から、九州の「豊かさ」、九州が抱える「課題」をみつめなおし、これからの九州のあり方を考えます。

「物の豊かさ」実現 成長緩やかに

私たちが何によって「豊かさ」を実感するかについては、評価の基となる対象や基準は、時代や同時代の世代間でも異なります。例えば日本の経済的な豊かさを示すGDP(国内総生産)は、1970年代半ばまでの高度経済成長期、1990年代前半までの安定成長期を経て、大きく高まりました。近年は、かつてのような伸びはなくなったものの、緩やかに成長が続いており、日本は、経済的な「豊かさ」を実現したといえるでしょう。

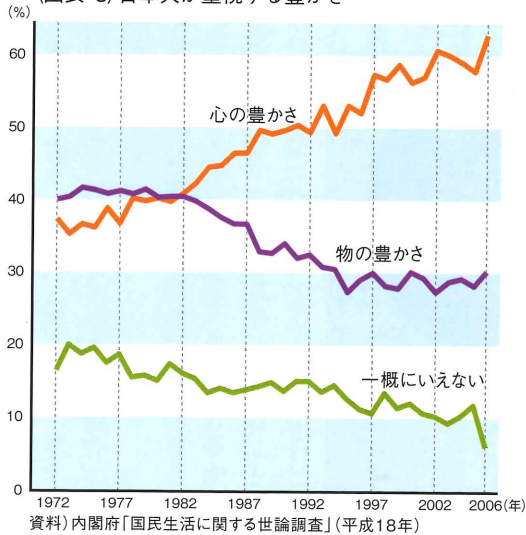
〈図表・1〉日本の名目GDP



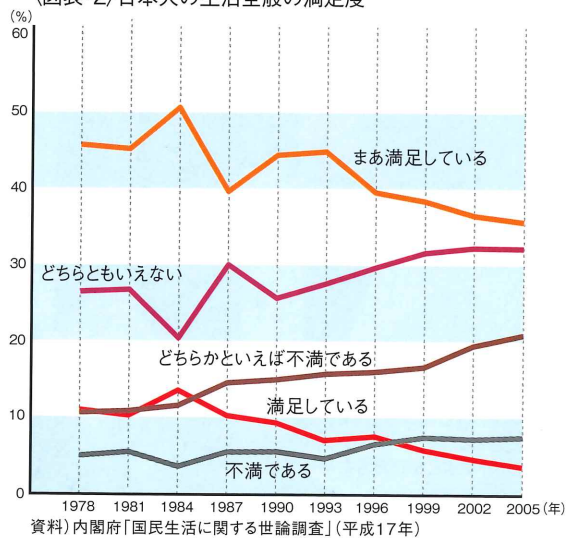
「心の豊かさ」志向強まる

一方、経済的な豊かさ以外の、主観的な豊かさ、つまり「心の豊かさ」は、それほど高まっていないようです。内閣府「国民生活に関する世論調査」によると、今の生活に「満足している」、「まあ満足している」はここ10年で低下し、「どちらかといえば不満である」は高まる傾向にあります。同じ調査では、日本人は今後の生活において、「物の豊かさ」を重視したいとの回答は減少する一方、「心の豊かさ」を重視したいとの回答が増えています。

〈図表・3〉日本人が重視する豊かさ



〈図表・2〉日本人の生活全般の満足度



「健康」「環境」は良いが
「教育」には課題も

世界における日本の位置

日本人が獲得した豊かさは、他の国に比べてどうなのだろうか。国民1人当たりのGDPを主要先進諸国と比較すると、1980年代後半から2000年頃まで日本のGDPは世界的にみても高く、1993年には世界第2位の地位を獲得していました。しかし、近年は順位を落とし、2006年は18位となっています。各国の実質所得（購買力平価）の違いや、産業構造、生活スタイルなどの違いがあるため単純な比較はできない面もありますが、GDPの成長は他の国に比べ低くとどまっているようです。

それでは、経済以外の豊かさや生活の質は、どうでしょう。国連開発計画が作成している「人間開発指数（GDP、平均余命、成人識字率、就学率などを基に算出した指数）」をみると、2007年の日本の順位は177カ国中8位でした。2006年から1つ順位を落とし、主要先進国に比べると高い順位です。平均余命などが高いことが、良い順位となった理由です。

次に、健康・環境・労働経済・教育・文明・マクロ経済の6指標からなる「豊かさ総合指標」をみてみましょう。2007年のデータをみると、まず、ノルウェーやデンマーク、スウェーデン、フィンランドなどの北欧諸国が上位となっている点が目を引きます。日本については、OECD30カ国中7位であり、北欧諸国に比べれば低いです。主要先進国の中では高

い順位となっています。日本は、平均寿命や病院・医師の数などを評価する「健康指標」や、森林面積やCO2排出量、水質の汚染度などを評価する「環境指標」が他国に比べて良いことが、先進国の中でも上位となった理由のようです。ただし、年間休日数や教員1人当たりの生徒数、出産育児休暇期間などを評価する「教育指標」や、経済成長率や財政の健全度などを評価する「マクロ経済指標」は他国に比べて低い点は、日本の課題といえます。

〈図表・5〉人間開発指数(HDI)の順位

| 順位 | 2005年 | 2006年 | 2007年 |
|----|---------|---------|---------|
| 1 | ノルウェー | ノルウェー | アイスランド |
| 2 | アイスランド | アイスランド | ノルウェー |
| 3 | オーストラリア | オーストラリア | オーストラリア |
| 4 | ルクセンブルク | アイルランド | カナダ |
| 5 | カナダ | スウェーデン | アイルランド |
| 6 | スウェーデン | カナダ | スウェーデン |
| 7 | スイス | 日本 | スイス |
| 8 | アイルランド | アメリカ | 日本 |
| 9 | ベルギー | スイス | オランダ |
| 10 | アメリカ | オランダ | フランス |
| 11 | 日本 | | |

資料) 国連開発計画「人間開発報告書」(平成19年)

〈図表・4〉OECD諸国の一人当たり名目GDP

| 順位 | 1985年 | 1993年 | 2006年 |
|----|---------|---------|---------|
| 1 | アメリカ | ルクセンブルク | ルクセンブルク |
| 2 | ノルウェー | 日本 | ノルウェー |
| 3 | スイス | スイス | アイスランド |
| 4 | カナダ | ノルウェー | アイルランド |
| 5 | スウェーデン | デンマーク | スイス |
| 6 | ルクセンブルク | アメリカ | デンマーク |
| 7 | アイスランド | ドイツ | アメリカ |
| 8 | デンマーク | オーストラリア | スウェーデン |
| 9 | 日本 | アイスランド | オランダ |
| 10 | フィンランド | スウェーデン | フィンランド |
| ∴ | | | ∴ |
| 18 | | | 日本 |

資料) 内閣府経済社会総合研究所「OECD諸国の一人当たり国内総生産」(平成18年)

〈図表・6〉国民の豊かさの国際比較

| 順位 | 総合 | 健康 | 環境 | 労働経済 | 教育 | 文明 | マクロ経済 |
|----|---------|---------|----------|---------|--------|---------|---------|
| 1 | ルクセンブルク | アイスランド | スウェーデン | ルクセンブルク | スウェーデン | ノルウェー | ルクセンブルク |
| 2 | ノルウェー | ルクセンブルク | オーストリア | ノルウェー | フィンランド | スウェーデン | ノルウェー |
| 3 | スウェーデン | スイス | ニュージーランド | アメリカ | スイス | ルクセンブルク | アイルランド |
| 4 | スイス | ノルウェー | 日本 | アイスランド | デンマーク | アイスランド | アイスランド |
| 5 | フィンランド | 日本 | スイス | スウェーデン | ノルウェー | フィンランド | デンマーク |
| 6 | オーストリア | オーストリア | カナダ | デンマーク | オランダ | スイス | スイス |
| 7 | 日本 | オーストラリア | ノルウェー | カナダ | カナダ | オランダ | スウェーデン |
| 8 | デンマーク | オランダ | ルクセンブルク | オーストリア | アメリカ | イギリス | フィンランド |
| 9 | カナダ | フランス | フィンランド | 日本 | アイスランド | 日本 | 韓国 |
| 10 | オーストラリア | アイルランド | 韓国 | イギリス | イギリス | アメリカ | オランダ |
| ∴ | | | | | ∴ | | ∴ |
| 13 | | | | | 日本 | | ∴ |
| ∴ | | | | | | | ∴ |
| 22 | | | | | | | 日本 |

資料) 社会経済生産性本部「国民の豊かさの国際比較2007年版」

遅れ目立つが 「住む」「癒す」「育てる」は優位

国内における九州の位置

次に日本における九州の位置づけについてみてみましょう。九州も全国と同様に、高度経済成長期を経て経済的な豊かさを獲得しました。しかし、経済的な豊かさには依然として格差があります。県民1人当たりのGDPを地域ブロック別にみると、九州は四国に次いで低いレベルとなっています。さらに、近年の現金給与総額をみると、南関東（埼玉・千葉・東京・神奈川）、全国平均と九州7県では大きな差があり、その差はさらに広がっています。

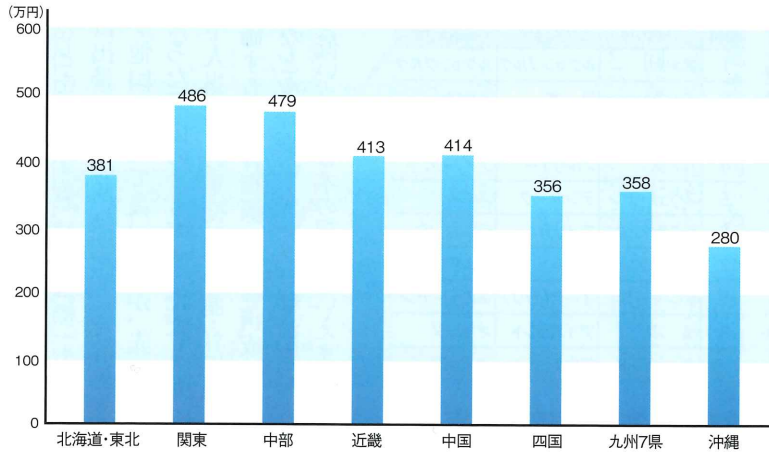
それでは、経済以外の豊かさはどのような位置づけにあるのでしょうか。新国民生活指標を全国平均と九州で比較すると、九州が全国を上回っているのは、「住む（居住環境など）」「癒す（医療・福祉環境など）」「育てる（育児・青少年育成環境など）」の3指標で、そのほかの分野は全国よりも低いことがわかります。

「住む」については、住宅の広さなど、居住環境の快適さを示すもので、九州は全国並の豊かさであるといえます。「癒す」は、病院・医師の数や介護施設などの医療・福祉サービスが高いことを示しています。「育てる」は、育児や小中高校などの基礎教育の充実度が全国並であることを表しています。

一方、全国に比べ低い指標のなかでも、「働く」「費やす」については、労働環境や所得環境に関する

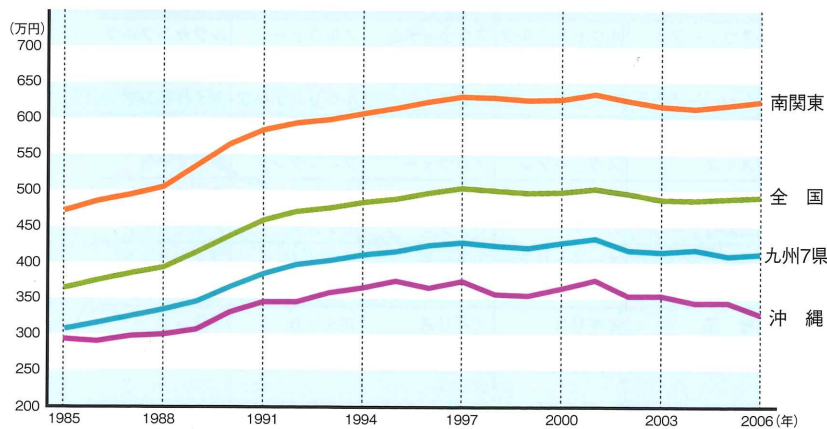
データを合成したもので、経済的な豊かさの格差を反映したものです。また、「学ぶ」「交わる」は地域生活や教育環境の豊かさを色濃く反映しています。「学ぶ」については、進学率のほか、図書館や博物館などの充実度が全国よりも低いことが原因のようです。「交わる」については、地域交流や社会的な活動が全国に比べ活発に行われていないことを示しています。

〈図表・7〉県民1人当たり実質GDP



資料)内閣府「平成17年度県民経済計算」

〈図表・8〉九州と全国の年間現金給与総額の推移

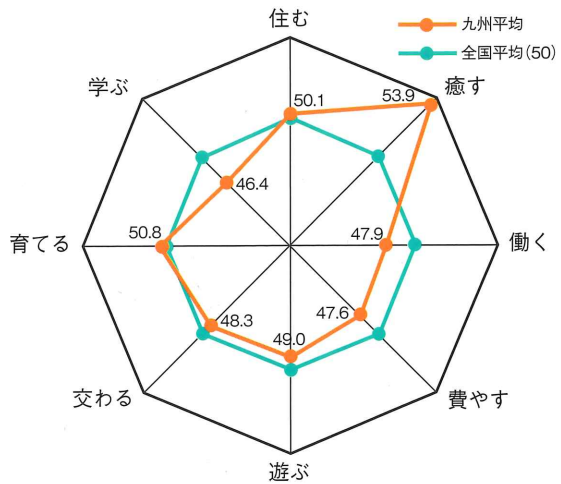


注)年間給与総額:きまって支給する現金給与額×12ヵ月+年間賞与その他の特別給与支給額
資料)厚生労働省「平成18年度賃金構造基本統計調査」

日本人は経済的な豊かさを獲得してきましたが、近年は「心の豊かさ」を実感できず、満たされないと考える人が多いことがわかりました。また、豊かさの指標を他の国と比べると、日本は経済的な豊かさだけでなく、生活関連のいくつかの指標で他の国に遅れをとっているようです。多くの指標では北欧諸国の良さが目立っており、今後日本・九州がより豊かになるためのヒントとなるものも多いと思われれます。

魅力と課題をみつめなおす

〈図表・9〉新国民生活指標における九州の位置づけ



資料) 経済企画庁「平成11年版新国民生活指標」

さらに九州においては、経済的な豊かさに他地域との格差がみられました。経済以外の生活関連の指標をみても、他地域に比べ「豊かさ」を獲得しているとはいえない状況にあるようです。

今後、私たちが九州での暮らしをより豊かなものにするためには、まず現在抱えている課題を解決することを考えなければなりません。新国民生活指標の結果は、経済的な豊かさの実現にとどまらず、教育環境や快適な仕事環境の実現といった、多方面の改善が必要であることを示しています。

また、課題の解決を考えるだけでなく、九州が持つ魅力をみつめなおしてみることも必要なのではないでしょうか。九州には豊かな自然や歴史、食文化があります。九州人に特有の温かな人柄は、九州内外の人の心を惹きつけるほどの魅力があります。これらはデータでは表せないものですが、心の豊かさを実感しながら生活できる環境づくりには欠かせないものだと思います。

それでは、私たちは九州の暮らしのどういった点を課題として解決し、どういった点を魅力として再認識することが求められているのでしょうか。次ページ以降の4つのインタビューでは、新国民生活指標を参考に「住む(住み良さと調和のとれたまちなみ)」「働く(労働・所得環境)」「遊ぶ(余暇時間の過ごし方・レジャー環境)」「育てる(育児・教育環境)」の4つの視点を設定し、九州の魅力と課題について考えてみたいと思います。

〈図表・10〉九州の暮らしの4つの視点

| 4つの視点 | 本誌での意味合い | 新国民生活指標のキーワード |
|-------|--|---------------|
| 住む | ・九州の住み良さやコミュニティのつながり ・調和のとれたまちなみがもたらす心の癒し等 | 住む・癒す |
| 働く | ・九州の労働環境 ・九州の労働者の所得や消費の状況等 | 働く・費やす |
| 遊ぶ | ・九州人の余暇時間や余暇を過ごす場所の充実度 ・都市農村交流等、レジャーを通した人のつながり等 | 遊ぶ・交わる |
| 育てる | ・九州の子育て環境 ・教育の場(高度教育、生涯教育等)の充実度等 | 育てる・学ぶ |

地域にオトナの居場所をつくるのが、地域の活性化につながる。仙台市から長崎県雲仙市千々石に移り住み、地域活性化に取り組む「TEAM GEAR」代表の松本由利さんに、地域・九州の魅力をつかがった。

熱いオトナが集う クラブハウスを千々石に

千々石で地域活性化の活動を始めたきっかけは、危機感でした。仙台から千々石に移り住んで、まず悩んだのは、自分が働く場所、そして地域の若者が誇りをもつて働ける場所がないことでした。まちが衰退してしまつては、自分が活躍する場もなくなつてしまう、そう感じたので、まず「地域に誇りを取り戻す」ことを仕事にしようと思ひました。

今、私と私の仲間たちで結成した「TEAM GEAR」では、「熱いオトナたちが集まれる場所づくり」を行っています。これからの地域を支え、次の世代を育む、熱いオトナが輝ける場所をつくるためのクラブハウス「竹添ハウス」を作りました。そこを拠点に、千々石を紹介するツアーやセミナー、カフェ、農業体験など、様々なコミュニティビジネスを生み出したいと思っています。千々石が好きで、信念を持ったオトナがたくさん集まることが、これからの地域活性化のカギだと信じています。

千々石でみつけた「コンパクトタウン」

千々石のような田舎のまちは、都会的な魅力はありませんが、生活に必要なものがコンパクトにまとまっている点は魅力的です。特に千々石は、たくさんの緑ときれいな海に囲まれていて、海の幸も山の幸も豊富。今必要とされている持続可能なライフスタイルが、田舎には既に備わっているんですね。私が千々石に移り住んだのは、このコンパクトさとすばらしい景色に強烈な魅力を感じたからです。

長崎県は九州のなかでもどんづまりで、離島も半島も多い。千々石もそのひとつで、特に交通などはとても不便です。でも、地域の魅力を熟成させて、地域を好きになつてもらうためには、不便ながらも穏やかな環境はとても魅力的だと思います。不便だ不便だと嘆いてばかりいては、地域は衰退するばかり。穏やかな環境の中で地域の良さをじっくりと育むことが大切だと思います。

地域の力で母が元気になった！

千々石に住んで一番驚いたのは、母が元気になったことです。事故がきっかけで「要介護2」となっていた母は、千々石に来るまでひとりでお歩くことなど全くありませんでした。千々石は安全だし、地域の人々も温かく声をかけてくれるので、母も安心したのか、よくひとりで出歩くようになりました。そうし

ているうちに、これまで全くしていなかった料理や洗濯もするようになり、千々石に来る前に比べて格段に元気になったのです。今では、「要介護1」を経て「要支援」まで回復し、元気に生活しています。

引きこもっていた母を外に連れ出したのは、地域の温かい目でした。いつも誰かが周りで見てくれていて、声をかけてくれる。こうした地域のコミュニティが母のような高齢者の生活を支えているのだと思います。温かいコミュニティがたくさん残っているのは、地域・九州の魅力だと思います。



地域の人が愛着のわく
やさしい空間づくりを



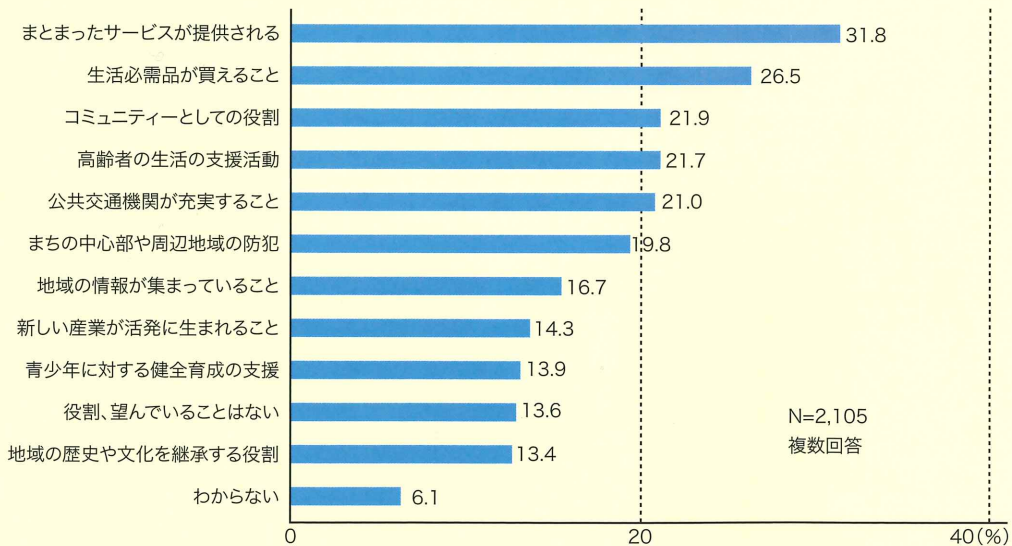
千々石だけでなく、不便とひとくくりにされがちな田舎には、住みやすい環境や温かいコミュニティ、おいしい食べ物など、魅力がたくさんあります。これから地域が活性化するためには、地域の魅力を改めて感じ、地域に愛着を持つ人たちがこれらの魅力を熟成させることが必要だと思います。また、そういった元気な人たちが、愛着を持ってまちに関われるしくみづくりも必要だと思います。まちなみや道、川なども、個性のない画一的な整備ではなく、地域の人たちが関われる余地を残すような整備が必要なのではないでしょうか。

例えば千々石のような田舎は、花や緑を植えるのが好きな人がたくさんいます。外からの人が気軽に立ち寄り、憩うことのできるゆつたりした歩道やベンチなどを作り、そこを地域の人たちの花や緑が包む。人がやさしくなり、人が憩えるような空間づくりができれば素敵だと思います。

キーワードからみる九州 「コンパクトシティ」

松本さんは、コンパクトにまとまった千々石の街に魅力を感じ、千々石に住む場所として選びました。商業機能、公共・公益機能が郊外へ移転する中で、今後「まちの中心部の役割や中心部への希望」においても、「小売店舗、金融機関、役所などの施設が集中し、まとまったサービスが提供されること」や「コミュニティとしての役割」などの回答が多く寄せられており、コンパクトシティ、コンパクトタウンといったまちづくりの推進が望まれています。

〈図表・11〉まちの中心部の役割や中心部への希望



資料) 内閣府「小売店舗等に関する世論調査」(平成17年)

TEAM GEAR 代表 松本 由利

1957年生まれ。宮城県仙台市出身。
2003年9月、宮城県仙台市から雲仙市千々石町に移住。活動的なオトナのコミュニティスペースづくりを行う「TEAM GEAR」を主宰し、地域活性化に取り組む。長崎県雲仙市定住促進協議会会長、日刊ブログ新聞「ぶらっと!」地域ライター。

九州の優れた本格焼酎を全国に売り込む：ベンチャー企業「(株)ルネサンス・プロジェクト」の代表取締役社長の中村鉄哉さんに、ビジネスを行っていくうえで九州・福岡の魅力と課題についてうかがった。

九州・福岡には高いポテンシャルがある

九州に来て10年になりますが、福岡の印象を一言でいえば、非常にポテンシャルがあり、成長の可能性の高い地域だということです。具体的には、交通アクセスがよく、豊かな自然環境があることが魅力です。

福岡は、新幹線も飛行機もすぐに乗れます。私は週のうち2〜3日は全国のどこか出張しますが、ビジネスを行う上で他地域へのゲートウェイとなつている福岡は非常に利便性が高い。もう一つは、これは私の持論ですが、人間は自然といかに共生していくかが重要で、住環境や自然環境はクリエイティブティの基盤であると思っています。福岡は、水が綺麗で緑も多く、また自転車でも通勤できるほどコンパクトで、ほどよく都市的機能と自然環境が混じり合っています。私自身も、自宅から天神のオフィスまで自転車通勤しています。

私たちが行っているのは、焼酎を中心とした九州の地場産品の商品企画・卸販売ですが、これはブランド・マーケティングであり、想像力が要求される仕事です。ルネサンス・プロジェクトは社員10名程度の小さな会社。大企業には資本力ではかかないので、クリエイティブティで勝負するしかありません。福岡に仕事と生活の拠点を置いたのは、このような環境が良いと考えたからです。

福岡の魅力は人々の心がオープンなこと

私たちの商品を扱ってもらっている飲食店を紹介する「Open」というグルメ雑誌を発行し、現在第4号まで出しました。雑誌の創刊は会社の設立当初から暖めていた企画で、創刊の狙いの一つは、単に商品売るだけではつまらない、そこに何らかの物語性なりメッセージを伝えたいと考えたからです。これからはブッシュ型(売込み型)のマーケティングだけでなく、消費者や顧客に「これイイな」と感覚的に思わせるプル型のマーケティングが必要だと思っています。

もう一つは、私たちを応援してくれた福岡のまちな人々への恩返しという意味もあります。福岡の良いところは、人々の心が非常にオープンなところ。私のようなよそから来た人でもうまく取り込んでも、まちの活力につなげていくような風土があります。商社にいたときも、独立して会社を興したとき

も、様々な方々から支援してもらいました。雑誌の名前を「Open」と名づけたのもここからです。その恩返しとして、福岡のまちを応援したい、食の分野でこれから伸びて行くであろう人々を応援したいという気持ちがありました。この雑誌を通じて、福岡から食文化の情報発信を行っていきいたいと考えています。



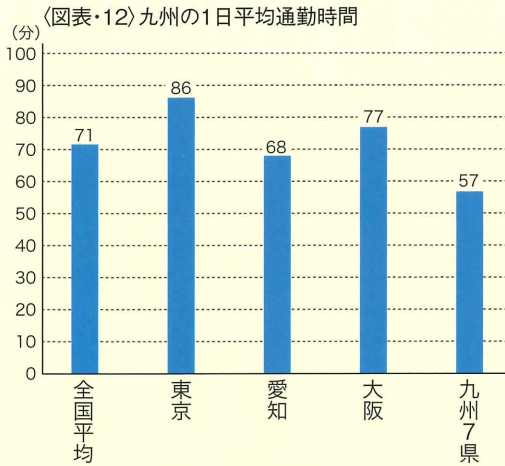
福岡は様々な実験が出来る適度な大きさ

また、福岡の良さは、様々な実験ができる適度な大きさであるところです。現在、3万部発行している「Open」も、東京ならコンビニに置いて1店舗に2、3冊しか行き渡りません。規模が大きくなりすぎて失敗できなくなっているのです。当社は既に九州域外での売上が9割を占めています。福岡ならトライアンドエラーができ、うまくいったことを全国展開する、ということが可能なのです。

私が自転車通勤していることもありですが、この福岡のコンパクトを活かすという意味でも、もっと自転車で配慮したまちづくりを目指してもいいのではないのでしょうか。自転車は環境にも優しいので、自然と共生したまちづくりの一環として、自転車を活かすまちづくりを目指してほしいと思っています。

キーワードからみる九州 「職住近接・交通インフラ」

九州・福岡の魅力のひとつは、働く場と住まいの距離が比較的近く、コンパクトにまとまっていることです。九州人の1日平均通勤時間は、全国平均より14分短い57分です。また、東京都より29分、大阪府より20分短く、通勤のストレスが少ない環境にあるといえます。



資料) 総務省「平成18年社会生活基本調査報告」

福岡市は、他の都市に比べ自転車で都心に訪れる人が多いという特徴があります。

福岡市天神地区は、かつて全国一放置自転車の多い街と言われていました。しかし、行政や市民の取組により、放置自転車の数は大きく減少しています。今後は、放置自転車のさらなる削減を行うとともに、自転車と歩行者がともに使いやすいまちづくりを進める必要があるでしょう。

(図表・13) 福岡市天神地区の自転車乗り入れ状況



資料) 福岡市資料(平成18年)

株式会社ルネサンス・プロジェクト 代表取締役社長 中村 鉄哉

1959年生まれ。山口県防府市出身。
1982年マサチューセッツ州立大学に留学、1984年北海道大学経済学部卒業。1984年三井物産入社。2006年三井物産を退社し株式会社ルネサンス・プロジェクト代表取締役に就任。

安心院のグリーンツーリズム 田舎ぶりがいいほうが勝ち

安心院町グリーンツーリズム研究会

会長

宮田 静一さん

大分県安心院町(宇佐市)は、都会の人が農家に宿泊する農泊(農村民泊)で人気を集めている。「安心院町グリーンツーリズム研究会」の会長を務める宮田静一さんに、グリーンツーリズムの魅力についてうかがった。

安心院は田舎ぶりがいい

安心院は、山や田圃、人柄が資源ですよ。この田舎ぶりで、安心院には全国各地から毎年6000人以上が集うようになりました。最近では韓国の農家もグリーンツーリズムを始めたいと勉強にきています。

春と秋には、福岡、北九州を中心に全国から修学旅行を受け入れています。修学旅行者数も年間3700人。子供たちは、2泊3日、他人と一緒に暮らすだけで、親しみがわき、最後には涙を流すほど感動しています。藁の束をみても珍しそうに「なんかこれ?」と聞いてきます。子供たちは、集まって、将来の夢を話したりもします。普段、表情のない生徒も目を輝かせて、いきいきと話しています。先生は、子供たちの変わりように、本当に驚いています。

今の教育は「人を信じるな」という教育になっていきます。それが、こうした体験をすることで「信じられる」ようになるんじゃないでしょうか。ある高校の

学園祭に招かれたとき、まるで親戚と数年ぶりに会ったかのように、子供たちと喜びあいました。修学旅行は2年先まで予約が入っている状況です。

グリーンツーリズムは女性が主役

受け入れる農家も、今は50軒になりました。それでも安心院だけでは受け入れられなくなつて、大分県全体でやろう、ということになってきました。

農泊の担い手は60歳代が主流。60歳代からはじめても十分間に合います。その年輪があつてこそ、もてなしや、人を惹きつけることができるのです。子育て世代ではまだまだダメ。子育てが終わつて、ゆつたりしているから、都会の人が癒されるような気がします。グリーンツーリズムは、家に他人を迎え入れるということですから、女性が中心の女将(おかみ)の出番です。女性が会計を握つて、名刺を持つこと、人と話すことです。だから、みんな生き生きしています。

都市と農村交流の基盤が必要

もし、12年前にドイツに行かなかつたら、このグリーンツーリズムはなかつたと思つています。

ドイツは農業が基本で、グリーンツーリズムは農

業政策とセットになっています。農家は、旅行者を泊めることで副収入を得ています。旅行者は、農作物やワインを車のトランクに一杯分買つて帰るなど、都市と農村がつながっています。高速道路も無料で、隅々まで行きわたつています。交流しやすい基盤ができています。

日本でも必要なことは、都市と農村が分散し、機能を分担することです。日本ももっと移動の費用を下げ、交流しやすい環境を整えるべきでしょう。それは農業農村の活性化にもつながると考えています。

日本人はもっと休んでいい

2002年、グリーンツーリズムにとっては画期的な出来事がありました。大分県生活環境部長の通





達で、農泊の壁になっていた旅館業法や食品衛生法などの規制が緩和されたのです。あと10年ばかりかかると思っていたので、急に変わって、なんだか拍子抜けしたくらいです。でもこれで、間違いなくグリーンツーリズムに弾みがつきました。

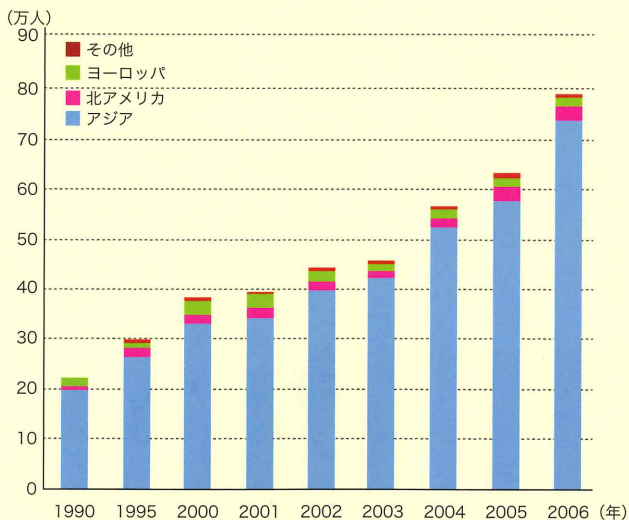
しかし、まだまだ課題もあります。国や県には、自家製のワインを製造し、販売できるような規制緩和や、普通に長期休暇がとれるようなバカンス法（ILO132号）の批准を求めています。と思っています。

日本人は休むとか、遊ぶとかいうことを罪悪と
思っているところがあるようですね。もっと、ゆつくり
暮らしていかなければ。

キーワードからみる九州 「外国人観光客」

九州は国内外の航空路線、鉄道、高速バス路線のほか、地理的な特性を利用し、韓国と福岡の間には高速フェリーも就航しており、早く、手軽に海外とも交流できる環境を備えています。こうしたことを背景にアジア（韓国や台湾など）からの観光客が急増しています。安心院のような豊かな自然に気軽に触れることができるのは、こうした交通網の充実も背景にあります。

〈図表・14〉九州への入国外国人数の推移



安心院町グリーンツーリズム研究会 会長 宮田 静一

1949年生まれ。大分県宇佐市出身。
1972年日本獣医畜産大学卒業。1996年、「安心院町グリーンツーリズム研究会」を発足し、会長に就任。会員制による農村民泊を実施。
2003年、グリーンツーリズムの取組が認められ、国土交通省「観光カリスマ百選」に選定される。

子どもがすこやかに生活できるまちにした
い…親と子の「コミュニティスペース」の運営支
援や、子どもの立場からのまちづくりの提案
を行う「ひだまりの会」支援アドバイザーの
武石優子さんに、子育て環境としての九州の
魅力や課題をうかがった。

まちから子どもが消えた？

結婚・妊娠して仕事を離れていた頃、まちを歩いていて、「ふと「あれ？子どもがいない？」と気付いたんです。いくら少子化とは言え、こんなに見かけないのはおかしい。幼少の頃のように、親子が家の前の路地やご近所だたむろしてる風景がない。幼児虐待のニュースが流れ始めた頃で、環境の変化に何か感じずにはいられませんでした。健やかに子を育て、子が育つには、地域の中に居場所があり、主体的に子育てしていただける環境が必要だ、そう思ったのが「ひだまりの会」の活動を始めるきっかけでした。

「ひだまりの会」は、子育て中の親子が集えるコミュニティスペースの運営・支援を中心に、子育てに関する講演会や研修会、ノウハウの提供や講師派遣、委託事業として「城南区子どもプラザ」の運営をしています。また、人が居るこちよく暮らせる町にするために、「子どもが育つまち」づくりの提案等を行っています。

「子そだち・親そだち・関係そだち」

子育てってね、思った通りにはいかないんです。初めてのことには、迷ったり、悩んだりして当たり前。子育てのあれこれがうまく伝承されていない現代の子育ては、不安感や焦燥感、孤独感が大きく、親も自らの子育てに自信を持ってなくなっています。コミュニティスペースというのは、「ここに来て一緒に迷ったり、悩んだり、泣き、笑いしながら、一緒に子育てしていこう」という居場所です。子どもたちが思い思いに遊びこみ、側で親が交流し情報交換をしている。自分の子、自分の親だけでなく、縦に横に、斜めにと多様な関係が広がっていきます。ここに来て、やっと自分たちが居ていい場所を見つけたと言って涙するお母さんもらっちゃうんですよ。

ここは、コミュニティスペースという名前からも分かるように、小さな「まち」のモデルだと思っています。ここで感じた居心地のよさや、いつのまにか培った多様な関係づくりを、それぞれの地域に持ち帰って育ててもらえると嬉しいですね。

子どもの目線で、まちを「生活の場」に

今、外に出づらくさせている一因は、ハード面にもあります。

家から一歩出ると車道で、ベビーカーを押す親や

子どものすぐ脇をすごいスピードで車が走りぬけて行く。なのに、歩道は斜面で歩きづらく、自転車走ると歩くスペースもない。歩道のない道も多いです。やっこの思いで公園に着いても、道路に面した公園は安心して遊ばせられなかったり、腰を下ろせるベンチや木陰、手を洗う水もない。飛び出しを防ぐ柵や低い街路樹があつたり、砂場やベンチには木陰があつたりするだけで、子どもも大人も和やかに過ごせる空間になりますよね。

まちを見回せば、背の高い無機質な建物に囲まれ、狭い空には電線のラインが入り、車や工事などの機械音にさらされている。そんな中で、子どもの感





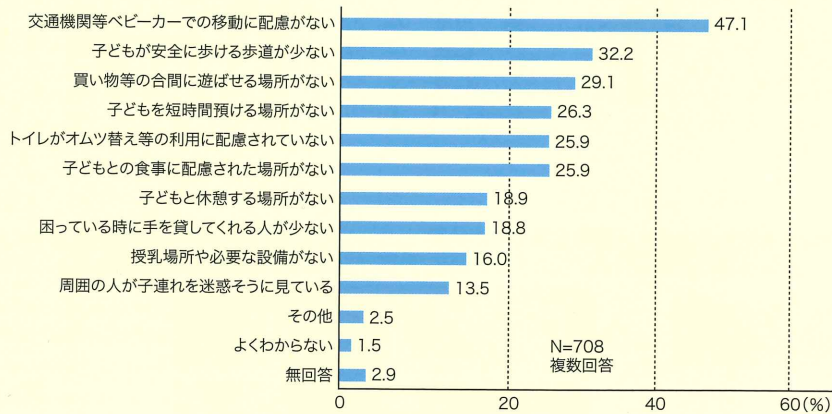
性は豊かに育つのでしょうか? 「心地いいな」という体験が少なくて、次世代に何を伝えていけるでしょうか? 子どもが育つという視点をもってまちづくりを進めることは、人という存在を大切に作る気持ちや、安心、安全を生み、住む人すべてにとって居心地よいものとなるのではないのでしょうか。コミュニティの再生のためには、何を優先に考えてまちを見直すかという根本的なところを、しっかりと積み上げていかななくてはいいないと思います。

私、ベビーカーを押すのがすごく下手で(笑)、緊張して道を通ってたんですけど、私みたいな人でも、ゆつたりとリラックスして歩いて過ごせるまちになればいいなと思っています。

キーワードからみる九州 「子育てにやさしいまちづくり」

武石さんやひだまりの会は、親と子が安心して歩ける道や、安心して過ごすことのできる川辺や公園等をつくるための研究・提案をおこなっています。アンケートによると、子育て女性は外出時に「ベビーカーでの移動に配慮がない」「子どもが安全に歩ける歩道がない」「子どもと休憩する場所がない」といった悩みを抱えているようです。九州においては、豊かな緑や川を活かし、自然とふれあうことのできる道や川を作ることが必要なのかもしれません。

〈図表・15〉子育て女性が外出時に困ること



ひだまりの会 支援アドバイザー 武石 優子

「地域ぐるみの子育てをすすめるひだまりの会」支援アドバイザー。子育てと並行して支援活動をスタート。乳幼児の親子の居場所づくり、及び支援者の研修等を行う。平成16年より福岡市の委託を受け、「城南区子どもプラザ」を運営中。同時に「ちびっこプレーパーク」など、乳幼児期からの育ちの場づくりを行い、「子どもが育つまちづくり」の提案・支援を推進する。

安全・安心で快適な暮らしの実現を目指して

ここでは、九州がこれから対応しなければならぬ課題を概観し、次号以降で取り上げる「安全・安心で快適な暮らしの実現」を目指す視点を紹介します。

暮らしを支える4つの分野

内閣府が行ったアンケート調査によると、国民が今後豊かで快適な生活を送るために重点を置くべき分野は、少子高齢化対策などの人口減少時代への対応や、防犯・防災・環境問題への対応など、多岐にわたっています。これらの今後重点を置くべき事柄として回答が多かった分野は、次の4つに整理して考えることができます。

まず、少子高齢化対策、持続可能な社会保障制度(医療・年金・介護)の構築などの「人口」に関することです。とりわけ地方では、人口減少・少子高齢化の問題が今後さらに深刻になることが心配されています。人口減少は、働き手の減少や消費マーケットの縮小、過疎化による地域コミュニティの崩壊などにつながり、地域の活力が低下してしまうことが懸念されます。今後の人口減少は避けて通れない問題です。

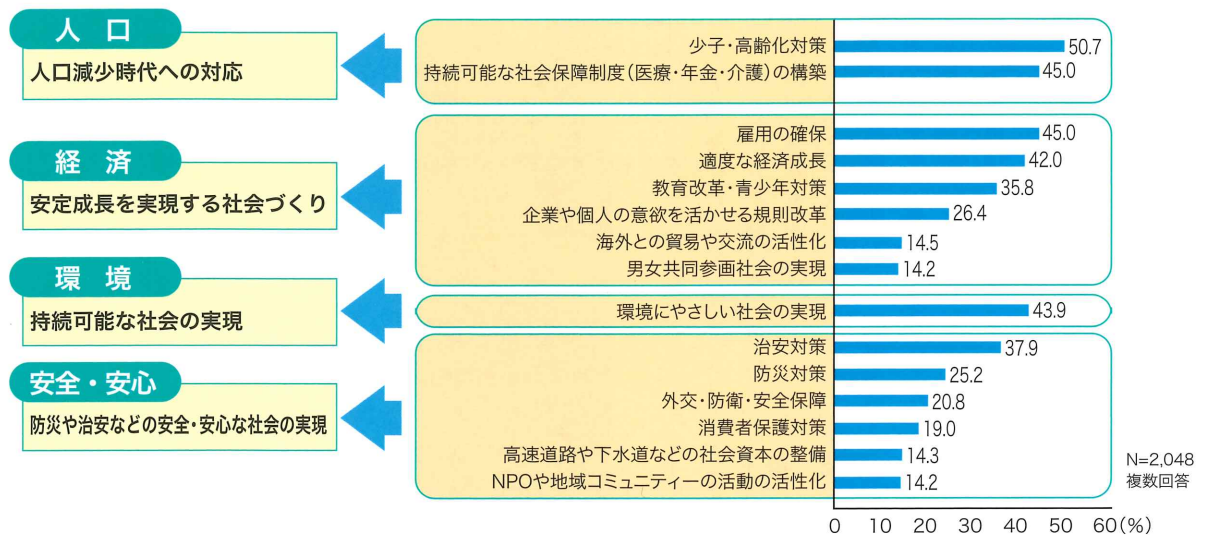
ので、私たちは、人口減少時代に対応したまちづくり、社会づくりを考える必要があります。

次に、雇用の確保、適度な経済成長などの「経済」に関することです。今後私たちが考えなければならぬのは、単なる経済成長ではなく、企業・個人の意欲を活かし、男女が平等に活躍でき、さらに仕事と仕事以外の生活をともに充実させることのできる社会づくりです。

環境にやさしい社会の実現についても、たくさんの方が寄せられています。地球温暖化対策や自然環境の保全など、「環境」に関する事柄も重要と考えられます。豊かな森や川、海、温泉などの自然は、九州に住む人々を豊かにするだけでなく、観光資源としてこれからの九州を支えるものでもあります。豊かな自然を守り、さらに住民が安心して暮らすことのできる社会づくりが必要です。

最後に、治安対策、防災対策などの「安全・安心」に関することです。近年、食に関する安全や、外交・防衛に関する安全など、生活すべての安全・安心に関心が高まっています。また、九州は台風被害や水害などの自然災害の多い地域であり、継続的な防災への取組も必要となります。

〈図表・16〉豊かで快適な国民生活のために重点を置くべき分野

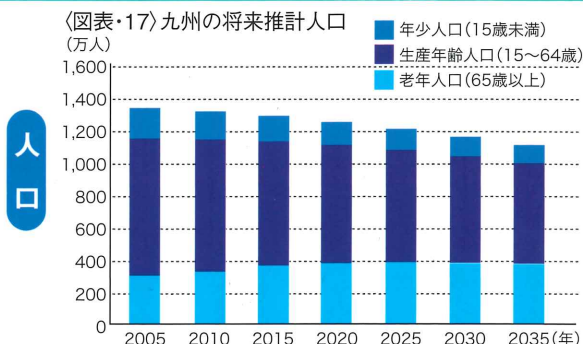


注) アンケート結果には、地方分権の推進などによる簡素で効率的な行政の実現、文化・スポーツの振興、科学技術の進歩、IT(情報通信技術)の推進などの分野も回答があった。
資料) 内閣府「日本21世紀ビジョンに関する特別世論調査」(平成16年12月)

【人口】～人口減少時代への対応

九州は既に人口減少・少子高齢化時代に入っています。現在、約1,335万人いる人口は、2035年には1,105万人まで減少し、高齢化率は現在の22.3%から34.6%まで高まると予測されています。人口減少・少子高齢化によって、生産活動や消費活動の停滞が懸念されます。また、都市部への人口集中と中山間地域での人口減少が、地域間格差をさらに拡大させるおそれもあります。

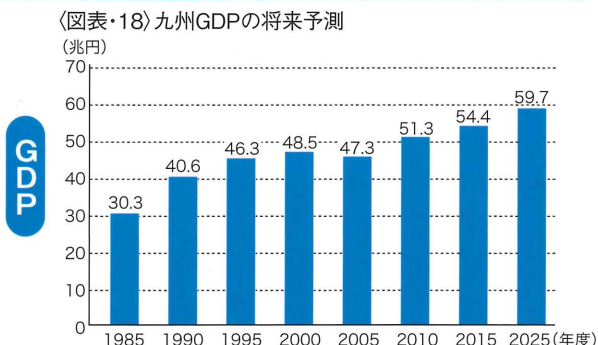
資料) 国立社会保障・人口問題研究所
「日本の都道府県別将来推計人口(平成19年5月推計)」



【経済】～安定成長を実現する社会づくり

九州の経済は今後も安定的な成長が見込まれますが、現在起こっている人口減少や人口の流出、産業構造の変化によって、国内、九州内で経済成長に格差が生じています。これからは、産業誘致や、優秀な人材を九州で活用する受け皿整備、地域の豊富な資源を使った観光振興など、九州に人を呼び込む産業を育てていくことが重要です。

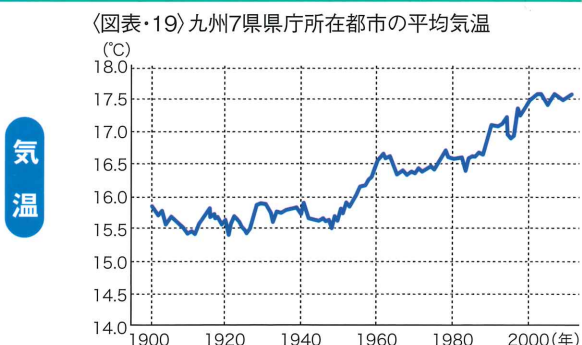
資料) 九州経済調査協会推計



【環境】～持続可能な社会の実現

九州7県の平均気温は、60年前に比べ約2℃、30年前に比べ約1℃上昇しています。地球温暖化は、海面の上昇や気象の変化をもたらし、生態系に悪影響を及ぼすことが懸念されます。九州では、気象の変化から水害などの自然災害が増える可能性があります。今後は、持続可能な社会づくりのための活動を考える必要があります。

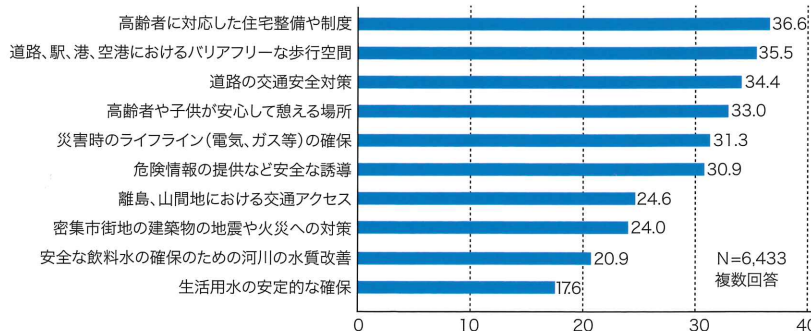
資料) 気象庁



【安全・安心】～防災や治安などの安全・安心な社会の実現

近年、私たちの生活の安全・安心が脅かされる事態が頻発しています。世論調査によると、安全な暮らしのために足りないこととして、高齢者に対応した住宅・街の整備や道路の安全性、災害対策等が上位に挙げられています。九州では、治安改善のための活動のほか、日本の食料供給基地として食の安全・安心を実現する取組、地震や水害などの自然災害に強い社会づくりなどが求められます。

〈図表・20〉安心できる暮らしのために足りないこと



資料) 九州地方整備局「九州の中長期ビジョン」(平成14年4月アンケート調査)

近未来創造 暮らしとインフラ

「あなたは今の暮らしに満足していますか？」
このような問いに対して、生活の満足度は低下の傾向が続いています。人々の価値観が多様化してきたとも考えられますが、心のゆとりが失われているとも考えられます。

日本の一人当たりのGDPを他の国と比べると、近年順位を落としており、国内でも九州の一人当たりの県民所得はブロック別で四国に次いで低い順位となっています。生活関連の各指標も決して高いものではありません。

特集「九州の暮らし」では、九州の暮らしぶりについて4名の方々に語って頂きました。そこには、日本が失いかけている地域のコミュニティや人の温かさが存在し、ほどよい都会と田舎が融合され、各地にコンパクトなまちづくり活動が行われている九州の姿がみえてきます。東アジアに近いという地理的利点のもとに活発な国際交流もなされ、九州のポテンシャルの高さも感じられます。決して悲観するものでもなく、九州の魅力を感じ取ることができます。

こうした中、今後の暮らしをさらに安全安心で快適なものにしたいと考えるのは九州に住む私たち共通の願いです。本誌では、九州が目指すこの安全・安心で快適な暮らしのあるべき

姿を人口、経済、環境、安全・安心の4つを念頭に置きながら、暮らしに身近なテーマを取り上げて、目標実現のためにどうすればよいのか、さらに社会資本との関係ではどうあるべきかを考えていきます。

社会資本は、インフラともいわれますが、インフラの「infra」は、存在しても認識できないというような意味があります。空気のようなもので、暮らしの中に身近にありすぎて当たり前であるが必要なもの。それが、社会資本でもあります。

他国に比べて、気象や地形・地質など自然条件で制約の多い日本において、活発な生産活動を継続し、経済的な豊かさを誇ってきたのは、国民生来の勤勉さとともに、普段あまり意識されることのない社会資本整備が、その背景にあったと言えます。

社会資本はその時代のニーズによってつくられてきましたが、最近では、質の向上やコミュニティの場など、新たな機能への要求の高まりがみられます。社会資本の利用者、使用者である市民が、いかに活用するかということを従来に増して深く考えるようになってきました。

社団法人九州地方計画協会は、社会資本の利用者、使用者と社会資本整備との橋渡しになりたいと考えています。

「社会資本」

「社会資本」とは、広く人々の福祉の向上や産業経済の発展のために整備・維持される「公共施設」のことで、大きくは道路、港湾、鉄道などの産業関連社会資本と、上下水道、学校、病院など生活関連社会資本とに分類されます。

共通しているのは、これら施設は通常、社会で共有する性格を持つ点だと言われ、一般にその整備や管理は民間事業として成立しにくいことから政府や公共機関により「公共事業」としてなされることが多いようです。

また、「社会資本」は「社会基盤」とも表現されることもありますが、これを意味する「Infrastructure（インフラストラクチャー）」は本来、「Infra-」が「下に」という意味を持つことから「下部構造」、「下部組織」を指すとも言われています。

それでは、「下部」が支えている「上部」とは何でしょうか？それが、「産業」であり、「経済」であり、「文化」・「教育」・「報道」など、人間活動のほとんど全てのもの、と見ることができます。

K-Shipとは、

同じ「九州」という島に暮らす私たちは、たとえば、時代を航海する「九州号」(K-Ship)という船に乗り合わせている者同士、という見方もできます。また「K-Ship」は、

KYUSHU **S**TYLE **H**APPINESS **I**NFRASTRUCTURE **P**UBLIC を念頭に置いています。
【九州】 【らしさ】 【幸せ】 【社会資本】 【利用者】

つまり、九州に暮らす皆さんが安全・安心で快適な暮らしを実現するためにはどうすればよいのか？ そのひとつの答えを、九州における九州らしい社会資本のあり方の面から見つけられればと思い、「K-Ship」の名のもとに情報発信していきます。「K-Ship」はこれから年に2回の予定で発行します。

社団法人 九州地方計画協会より

公益支援事業

九州地方における社会資本の整備拡充と公共事業の円滑な推進を図り、もって地域の発展に寄与することを目的として、ダム・水資源や地域づくりに関わる各種、多様な活動を実践する個人や団体等を支援する事業です。

九州地方における社会資本の整備やその拡充に大きく寄与する公共性の高い以下の事業に対し支援を行います。特に当協会では、ダム・水資源・地域づくり活動を対象に支援を行っています。

1. 社会資本整備に関わる広報・啓発・実践活動

- (1)パンフレット、図書等の刊行及びそれらの配布
- (2)イベント・講演会等の実施
- (3)ダム・水資源、地域づくりに関わるボランティア団体等の行うイベント等

2. 社会資本整備に関する調査・研究

- (1)調査・研究の実施

3. その他

- (1)社会資本整備に関するその他の公益的事業・活動
- (2)防災に関する活動

詳しくはホームページをご覧ください。 <http://www.k-keikaku.or.jp/>

編集 後記

EDITOR'S VOICE

松中選手にインタビューしている頃、大リーグでは桑田真澄投手の引退発表が行われていました。桑田投手はテレビのインタビューで、「桑田さんにとって野球とは何でした？」という問いに、「砥石ですね。自分を磨いてくれるもの。」と答えました。仕事が砥石。それによって自分が磨かれる。共感したのを覚えています。

本誌の取材でインタビューさせて頂いた方々は、今まさに輝いている人たちですが、それぞれの砥石で磨かれてきたのだと思いました。野球に、子育てに、地域活動に、そしてビジネスに。磨くということは、その時ばかりでなく、長く、辛抱強く、自分の砥石で磨き続けなければならないもの。取材させて頂いた方々の活動、活躍を通じてそう感じました。

本誌に対するご意見をお聞かせください。

(社)九州地方計画協会 企画部

〒812-0011 福岡市博多区博多駅前1丁目19番3号 TEL 092-473-1057 FAX 092-475-0533

e-mail k-ship@k-keikaku.or.jp



人と自然、日々集い、響き合う 大分の七瀬川自然公園



自販機もゴミ箱もゼロ

大分市の七瀬川自然公園は、洪水対策で作られた市捷水路(流れのショートカット)と旧河川敷に挟まれた三角地帯の約17ha、「川の通信簿」で「五つ星」と評価された美しい公園だ。採点厳しく5評価は1%ならず、全国わずか4ヵ所。

園内に遊具や自動販売機がない。ゴミ箱もないが、ゴミ一つ見当たらない。芝生広場で、河川敷で、林で、水辺で老若男女が思い思いに過ごす。「今年は菜の花が小さくて数少ない。なぜか。」—水辺で何度も悔しがる志水創一さん(68)。七瀬川自然公園を支える会の会長だ。

若竹がすっと伸び、梅林はまもなく実を付ける。「梅ちぎりは誰でも自由にできる」と志水さん。「ボール遊びは子供に一番いい。土手滑りも楽しい。少々けがしてもたくましく育つ」と優しい目だ。「河川敷や林はバーベキューの名所。だが東屋じゃ困る。禁止と書かれてないといいと思うんだなあ、現代人は…」。所々の看板を恥じる風。

時折ぼやきも混じるが「大概は大目に」と何度も聞いた。ボランティア管理が定着している。「住民が大事に使い、維持管理すればお堅い行政も動く」—志水さんの言葉はまるで公共施設の未来論、提案のように聞こえる。「ここがそのモデル」と一。



三角地を育てた住民と行政

会の発足は、捷水路と公園の完成と同じ平成11年。会員25人。日常の手入れや管理を支え、イベントなどを手掛ける。国・市との関係が絶妙、もの申しもするが、行動が伴うので一目置かれ、「協働」が実現した。これには前史がある。

旧肥後街道沿いの一級河川・七瀬川は、何度も大きく蛇行し、参勤交代の列が七つの瀬を渡ったから七瀬川。雨季、水が溢れやすく、今も堤防が高い。国交省の捷水路計画に合わせて三角地帯公園化を大分市が提案。農家農地移転問題を含め実現に尽力・協力したのが自治委員だった志水さんら現在の会員たちだ。

(原田 真紀)



【七瀬川自然公園】

所在地: 大分市大字市175
交通: 大分光吉ICから約2km、車で6分